

農薬の蜜蜂への影響を軽減するための取組と評価法の導入について

- 欧米では、近年、蜜蜂の大量死が報告されており、主な要因として、「栄養不足」、「ダニ等の寄生虫や害虫」、「病気」等のほか、「農薬」の影響も指摘されている。
- 我が国における蜜蜂の減少事案においても様々な原因が考えられ、農薬が原因と疑われるものも報告されているが、事案との関係について十分なデータが得られていないかった。そのため、農林水産省は、農薬と蜜蜂の被害との関連性を把握し、事故の発生要因を考慮した被害軽減対策を策定するため、2013年度から2015年度までの3年間、農薬が原因と疑われる被害発生事例の全国調査を行った。
- 調査の結果から、農薬が原因と疑われる被害の発生は、夏季の水稻カムシ防除の時期に多く、巣箱の周辺で採取された蜜蜂の死虫から、カムシ防除に使用される殺虫剤が検出されたため、水田周辺に飛来した蜜蜂が水稻のカムシ防除に使用された殺虫剤を直接浴びたことが原因の可能性が高いと考えられる。ただし、どの殺虫剤が被害を発生させているのかの特定はできなかった。
- このような被害の軽減のため、農林水産省は、①農薬使用者と養蜂家の間の情報共有、②養蜂家による巣箱の退避・巣門の閉鎖等の対策、③農薬使用者による農薬の使用の工夫(蜜蜂の活動が盛んな時間帯を避けた使用等)等の対策を被害事例調査の中で都道府県に指導してきており、一定の効果がみられている。
- 一方、農薬登録時の審査においては、これまで蜜蜂の成虫が農薬を直接浴びた際又は農薬を含んだ餌を摂取した際の毒性の強さを試験により評価し、毒性の強さに応じて使用上の注意事項を付してきたところである。
- しかしながら、登録時の審査において蜜蜂に対する農薬の影響をより的確に評価するためには、①毒性の強さによる評価だけでなく、使用方法なども考慮して蜜蜂の成虫がどのくらい農薬に暴露したか等の観点で評価を行うほか、②農薬に暴露した花粉や花蜜を持ち帰った際の巣内の成虫や幼虫への影響等、暴露経路を通じた群全体への影響について評価することなどが必要であると考えられる。
- このため、農薬使用現場の暴露実態を反映した評価方法への改善を行うとともに、評価結果に応じて使用方法の見直し等も行い、蜜蜂に対するリスクの一層の軽減を図る。